

ジャンルを超えた共通性（４）

—デフォー作品における政治・歴史・文学—

干 井 洋 一

本稿を含む一連の論考では、政治小冊子と長編小説という異なるジャンルを対象に、デフォーが設定した語り手の独自性、アイロニーの技法、歴史的事例の用い方という３つの特徴に着目しつつ、デフォー作品がもつ共通点について考察する。本稿では前稿に引き続き、『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(*Reasons against the Succession of the House of Hanover*, 1713)を取り上げる（ハノーヴァーではなく英語読みを用いる¹⁾）。本稿では、アイロニーの有無、史実の活用の仕方に焦点を当てながら作品分析を行なう。

I

上述した問題を考察していくに当たり、まずは『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』（以下では『王位継承に反対する理由』と略する）の構成を以下に示す。

- (a) 冒頭部分
- (b) ハノーヴァー家の王位継承に反対であると述べる箇所
- (c) ジェーン・グレイに関する史実を導入する箇所
- (d) 絶対王政への忠誠を取り上げた箇所
- (e) 王位継承に反対する理由としてフランスの脅威を挙げる箇所
[本稿では以下を後半部とする]
- (f) 英国を病人に喩える箇所
- (g) ロバート・スペンサーに関する史実を導入する箇所
- (h) リチャード2世に関する史実を導入する箇所

(i) 僭王ジェームズに王位継承資格がないと断言する箇所

(j) 結論部分

次に、作者デフォーが『王位継承に反対する理由』において、読者に伝えようとした内容を確認しておきたい。王位継承問題に関するデフォーの持論は以下の3つにまとめることができる。

1. 英国民は1701年の王位継承法を遵守すべきであり、アン女王の跡は、新教徒であるハノーヴァー選帝侯ジョージが継ぐべきである（カトリックを奉ずる僭王ジェームズの王位継承に反対）。
2. 名誉革命こそ英国の礎を成すものであり、議会によって承認されたウィリアム3世の治世こそ、英国が断固として守り抜き、継承していくべきものである（血統だけを重視したスチュアート王家による王位継承は否定すべきであり、またルイ14世が体现する絶対王政は否定すべき）。
3. カトリック国フランスの力は殺ぐべきであり、その意味でもルイ14世の庇護下にある僭主ジェームズが次期国王となることは許されるべきではない（議会を尊重するという英国における現行の政治体制を維持すべき）。

II

『王位継承に反対する理由』を初めて本格的に論じたサザランドは、(e)の箇所ですべてアイロニーが明確になると述べ、(c)の箇所、つまりジェーン・グレイに関する史実を導入した箇所においては、アイロニーは曖昧なままであると看做している。まずは、サザランドの見解を以下にまとめてみよう²⁾。

(1) デフォーの持論からすると、プロテスタント以外の王を選ぶことなど「全くの問題外」であり、また、宗派ではなく血統の方を重視してカトリックの王を選ぶことも「余りに愚かなこと」であった³⁾。そのため、(2) デフォーは、プロテスタント弾圧をもたらすことになった流血のメアリー女王の史実を、読者に思い出させるだけで、読者はカトリックの僭王ジェームズを拒み、

プロテスタントの選帝侯ジョージの側を支持することになると考えたのだと、サザランドは主張する。さらにサザランドは、（３）デフォーにとっては当たり前の論理は、残念ながらトーリー右派やジャコバイト派には通じず、この箇所においてはデフォーが用いたアイロニーが明確であるとは言えないと看做している。そして「選帝侯ジョージに冷ややかな目を注いでいたトーリー右派」や「どのような代償を払ってもジョージが王位に就くのを阻止しようとしていたジャコバイト派」は、デフォーとは全く反対の立場をとっていた⁴⁾。そのためデフォーにとっては自明の理といえること、つまり「カトリックである僭王ジェームズを拒み、プロテスタントである選帝侯ジョージを支持すること」は、彼らにとっては当然の選択とはいえなかったのだとサザランドは説明する⁵⁾。そして最後に、（４）語り手は過去に起きた事件を読者にただ提示しているだけであり、1553年の王位継承は大失敗であったという価値判断が下されているわけではないので、「多くの英国人は同じ様なことがまた起きる可能性があり、それに対して特に打つ手はないと感じてしまうのだ」と、サザランドは締めくくっている⁶⁾。

サザランドの主張には極めて妥当な部分と、疑問を感じざるを得ない部分とがある。まず、主張（１）、つまり、英国の王位を継ぐものはプロテスタント教徒に限るべきであり、血統を重視してカトリック教徒を王として選ぶなど有り得ないとデフォーは考えていたという、サザランドの主張は全面的に賛同できる（本稿の第Ⅰ節で言及したデフォーの持論を的確に踏まえたものである）。しかし、サザランドの主張（２）から主張（４）については、議論が十分尽くされているとは言い難い。これらの主張に対しては、作中の該当箇所を詳しく分析していく必要があるだろう。まずは、サザランドが提起した、主張（２）から主張（４）までを簡単にまとめておきたい。

主張（２）

メアリー女王によるプロテスト弾圧に言及するだけで、読者は選帝侯ジョージの王位継承に賛同するという主張。

主張（3）

語り手の論理はトーリー右派やジャコバイト派には通じず、(c)の箇所においてはアイロニーが明確であるとは言えないという主張。

主張（4）

1553年の王位継承と同じ様なこと（新教ではなく旧教を奉ずるものが王位を継承し、プロテスタント弾圧が起きること）が、今回の王位継承においても起きてしまうだろう、そして大多数の英国国民はそれに対して打つ手が無いと感じてしまうという主張。

Ⅲ

『王位継承に反対する理由』の(c)の箇所で、デフォーは16世紀半ばに起きた王位継承問題を取り上げているが、まずは、過去の史実として導入した、16世紀の王位継承問題と、本作品出版時（18世紀初頭）の王位継承問題との関係をまず説明しておきたい。16世紀の王位継承問題においては、プロテスタント教徒であるジェーン・グレイ支持派と、カトリックであるメアリー支持派とが対立していた。「9日間の女王⁷⁾」として知られるレディ・ジェーン・グレイは（即位が数日であったためジェーン女王とは呼ばない）、ヘンリー8世が始め、彼の息子であるエドワード6世が推し進めていた英国の宗教改革を引き継ぐという名目のもと、策謀家である初代ノーサンバランド公ジョン・ダドリーによって担ぎ上げられた、王位継承候補であった。一方、英国内には、カトリックではあるものの、ヘンリー8世の娘メアリーを女王として擁立しようとする勢力も存在していた。そして、一旦ジェーンは王位に就いたものの、その即位は9日間に過ぎず、結局、彼女はメアリーを支持する勢力に敗れ、ロンドン塔で処刑されている。その後、女王となったメアリーは英国内でのカトリック教の復活を試み、抵抗するプロテスタント教徒たちを迫害し、「流血のメアリー」と呼ばれることになる⁸⁾。

以上のような、16世紀の王位継承におけるプロテスタント対カトリックの対

立は、本作品『王位継承に反対する理由』が出版された、18世紀初頭の王位継承における対立の先行例と看做することができる。18世紀初頭の王位継承においては、英国内は以下の2つの勢力に別れていた。プロテスタントであるハノーヴァー選帝侯ジョージを支持する側と、カトリックである僭王ジェームズを支持する側という2つの勢力である。このように、16世紀における、プロテスタントのジェーンを支持する側と、カトリックのメアリーを支持する側という対立図式は、18世紀における、プロテスタントのハノーヴァー選帝侯を支持する側と、カトリックの僭王ジョージを支持する側という対立図式と同型なのである。

そしてデフォーは第I節で述べたように、「プロテスタントであるハノーヴァー選帝侯ジョージがアン女王を継ぐべきであり、カトリックを奉ずる僭王ジェームズの王位継承は問題外である」という立場をとってきた。このようなデフォーの持論からすると、16世紀の王位継承は全くの失敗例なのであり、デフォーは16世紀の王位継承を次のように批判的に捉えていた。

そもそも英国民はカトリックであるメアリーを王位に就けるべきではなかった。メアリーの即位を英国民が認めたことは、英国内に根付き始めていた、ヘンリー8世による宗教改革を台無しにしてしまう愚行であった。メアリーがヘンリー8世の長女であるという、血統上の優位にこだわり過ぎたため、カトリックであるメアリーを女王の座に就かせ、その結果、メアリーによるプロテスタント弾圧が起きたのである。もし、英国民が一致団結して、プロテスタントであるジェーンを次期女王として一貫して支持し、英国内の新教主義を断固として守ったならば、スペイン流の専制主義や教皇主義を英国内に招き入れることなく、ヘンリー8世に始まる宗教改革を押し進めることに成功したであろう。しかしながら、当時の英国民は宗派ではなく血統の方を重んじたため、宗教改革の成果を放棄してしまったのである。英国民による愚かな選択の結果、メアリー女王が主導するカトリック反動が起き、プロテスタント弾圧という悲劇が引き起こされることになった。三百人にも及ぶ多数のプロテスタント殉教

者が出たことも、英国民の愚行によって生じた結果と言えるだろう⁹⁾。

王位に就いたメアリーは、英国におけるカトリックのさらなる復権を企てた。この目的を達するために、メアリーはスペイン皇太子フェリペと結婚し、その結果カトリック強国スペインによる英国への悪影響がより強まったのであった。以上のように、16世紀の王位継承は全くの失敗例だったのであり、今回の王位継承においては、16世紀の失敗例を糧にすべきだとデフォーは考えていた。今回こそは、英国民は前回のような愚を犯すことなく、一丸となって、プロテスタントである選帝侯ジョージの即位を支持すべきなのである。それは、カトリックである僭王ジェームズの即位を阻むことであり、さらには彼の後ろ盾となっている、カトリックの強国フランスの介入を避けることにもなる。本作品の作者であるデフォーは、ジェーン・グレイの史実を、以上のように解釈していたのであった

IV

本作品を読み始めた読者は、『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』という題名から、語り手は選帝侯ジョージの王位継承に反対している（僭主ジェームズを支持している）と考えるだろう。だが語り手は選帝侯ジョージを支持する側に立っており、アイロニーを通して読者に自らの主張を伝えようとしている。そのため読者は、作品をある程度読み進めないと、語り手の真意を知ることができない。語り手が実際には僭主ジェームズの即位に反対であり、彼が支持しているのはプロテスタントの選帝侯ジョージであることが、アイロニーを通して段々と読者に伝わるという仕組みになっている。

このように作品全体を俯瞰的に捉えると、語り手がジョージ支持派とジェームズ支持派という両派の対立を浮き彫りにしつつ、アイロニーを駆使しながら、最終的にはプロテスタントのジョージを王位継承者として支持していることが次第に明らかになってくる。このような作品構造となっているため、ジェーン・グレイの史実を導入した、(c)の箇所においても、上述の2分法

が用いられていても不思議ではない。

しかしながら、デフォーは（c）の箇所においては、プロテスタント対カトリックという二分法を用いることなく、英国国民全体をひと括りの存在として扱っている。デフォーはジェーンの即位を受け入れた後、次にメアリーの支持に廻った英国国民全体を、語り手が揶揄するという論法をとっており、プロテスタント対カトリックという二分法（ジェーン支持派とメアリー支持派との対立という二分法）を用いていないのである。

作品全体の構図からすると、（c）の箇所においても、他の箇所と同じく二分法を前面に打ち出した方が、より自然な展開となったであろう。しかしながら、ジェーン・グレイの史実にはプロテスタント支持派にとって不都合なことが余りにも多く含まれていたため、デフォーは（c）の箇所においては、二分法を用いることができなかったのである。

プロテスタント支持派にとって不都合な点を具体的に挙げていくと、以下の3つとなるであろう。第1に、プロテスタント支持派が敗れ、カトリック支持派が勝利したという過去の実例を、現在の王位継承の参考例として導入すること自体がそもそも無謀な試みであった。というのも、本作品において、語り手はアン女王の跡は、プロテスタントであるハノーヴァー選帝侯ジョージが継ぐべきだという結論を引き出したのであり、プロテスタント支持派が敗れるという酷い失敗例を紹介することは、語り手の目的に沿っているとは言えないからである。

第2に、ジェーン・グレイの史実においては、カトリック支持派が勝利した結果、プロテスタント支持派への苛烈な弾圧が実際に起きたという点も大いに問題がある。プロテスタント側に殉教者が多数出たという史実を取り上げると、読者に強い不安を与え、今回の王位継承問題に関与するのは止めておこうと考える英国国民が多数出てきても不思議ではないからだ。

第3に、英国史に通じている読者は、ジェーン支持派には非難されても仕方がない要素が多々あることを理解しており、一方では、メアリーに対する英国

民の支持が、即位前後は相当高かったことを熟知しているという事情があるからだ。16世紀半ばのジェーン・グレイの史実においては、ジェーンに人々の同情は集まったものの、彼女を背後で操っていた初代ノーサンバランド公ジョン・ダドリーの悪辣さが際立っていた¹⁰⁾。そのためジェーン擁立にあたって、ジェーン支持派は、英国における宗教改革の推進という大目標を一応は掲げているものの、英国民の中には、ジェーン支持派に疑いの眼を向けているものも多かったのである。

ダドリーの画策により、一旦はジェーンが王位に就いたものの、ヘンリー8世の娘であるメアリーの人気は依然として高く、結局はジェーン側が敗れている。たとえ、カトリックのメアリー女王が即位した後に、悲惨なプロテスタント弾圧が起きているという事実を強調したとしても、ジェーン・グレイ事件を、現在の王位継承の前例として取り上げるのは色々と不味いのである。そして、チャールズ・モートンのもとで（彼は後にハーバード大学の副学長を務めた）各国の歴史を学び、英国史に造詣の深かったデフォーは、以上のようなジェーン側がもつ難点をしっかりと把握していたのであった¹¹⁾。

このような事情を踏まえながら、第Ⅱ節でまとめておいた、サザランドの解釈を一つずつ検討してみよう。まず、「メアリー女王によるプロテスタント弾圧に言及するだけで、読者は選帝侯ジョージの王位継承に賛同する」ことになるという主張（2）については、納得できる部分もあるものの、全面的に彼の主張が妥当であるとは言えないであろう。確かに、ジェーン・グレイの史実においては、最終的にはカトリックのメアリー側の勝利で幕を閉じたのであるから、サザランドが述べるように、過去の失敗例を突き付けられた読者は、今回の王位継承においては、是非ともプロテスタントである選帝侯ジョージに勝ってもらいたいと考えるかもしれない。しかしながら、読者は同時に、過去の史実において、ジェーンがすぐさま王位を追われ、その後、メアリーによるプロテスタント弾圧が起きたという大惨事を思い起こすことになる。そのため、読者は選帝侯ジョージとジェーンを重ね合わせ、選帝侯ジョージを積極的に支持

することは止めようとするかもしれないのだ。このように「読者は選帝侯ジョージの王位継承に賛同する」というサザランドの主張を全面的に支持することはできない。

次に、「1553年の王位継承と同じ様なことが、今回の王位継承においても起きるだろう、そして大多数の英国民はそれに対して打つ手がないと感じてしまう」という主張（４）について考えてみよう。確かに、サザランドの言うように、16世紀の王位継承は失敗に終わったのであり、今回も選帝侯ジョージは敗れ、僭主ジェームズが王位に就くことになるだろうと読者が考え、早々と諦めてしまうという可能性もある。しかし、英国史にある程度通暁した読者は、ジェーン側が様々な問題を抱え込んでいたために、王位をしっかりと保持できず、最終的にはメアリーに王位を奪われることになった経緯を十分理解していたであろう。その場合、読者は、今回の王位継承のケースでは、ダドリーの策謀や、血統上の不利（ジェーンはヘンリー7世の曾孫であった）といった問題点を抱えていないので、選帝侯ジョージは滞りなく次期国王になることができると考えてもおかしくはない。このようにサザランドの主張（４）についても疑問を投げ掛けざるを得ないのである（主張（３）については次節以降で検討する）。

V

前節で述べたように、(c) の箇所においては、本作品の語り手がプロテスタント支持派とカトリック支持派とを別々に扱うことなく、両派を同じ英国民として、ひと括りにしていることに着目すべきである。

Another Reason may be taken from the Example of the good People in the Days of King Edward VI. They were very Good, Religious People, (that must be allow'd by all Sides.) and who had very great Zeal for the Protestant Religion and the Reformation, as it was then newly

establish'd among them; and this Zeal of theirs appear'd plainly in a Degree we can scarce hope for among the Protestants of this Age, (*viz.*) in their Burning for it afterwards; yet such was their Zeal for the Hereditary Right of their Royal Family, that they chose to fall into the Hands of Spanish Tyranny, and of *Spanish* Popery, and let the Protestant Religion and the Hopes of its Establishment go to the D—l [=Devil], rather than not have the Right Line of their Princes kept up, and the Eldest Daughter of their late King Henry come to the Crown. (emphasis added, 171)¹²⁾

引用部分は短い1番目の文と、10行からなる長い2番目の文という、2つの文から構成されている。1番目の文で、語り手は「エドワード6世治下における善良な人たち」(英国民のこと)の振舞いという具体例が、選帝侯ジョージによる王位継承に反対する、もう一つの理由になると述べている。善良な人たちの振舞いが、なぜジョージ派への反対理由になるのかについては、第Ⅶ節で検討することとし、まずは2番目の文において、語り手が英国民全体を揶揄していることについて述べる。

2番目の文は次のような内容となっている。まず、語り手は文の前半部で、彼らは、あらゆる側から支持を受けており、「極めて善良であるとともに、敬虔な人たちである」と大いに褒め称えている(2行目から6行目)。そして、文の後半部では、彼らが自らの信仰に反してまで、王位継承者の血統を重視したために、カトリックであるメアリーの即位を認めてしまい、その結果、英国内のプロテスタントへの弾圧を招くという大惨事を引き起こすことになったと語る(6行目から10行目)。

それでは1行目の「善良な人たち」、そして、それを受けた2行目の「彼ら」とは誰のことを指しているのだろうか。引用部分の、直前のパラグラフを見ると、「善良な人たち」とは英国民全体であることがわかる。直前のパラグラフでは、英国民である彼らが、もし王位継承において、その支持を一つにまとめ

上げていたならば、スペインの強い圧力にもかかわらず、ジェーンの王位継承を守りきっていたであろうと語り手は述べている（メアリーの母親 Catherine of Aragon はスペイン王の娘であった）¹³⁾。

以上のように、上述の引用箇所では、語り手はジェーン支持派とメアリー支持派との対立という二分法を持ち出すことなく、英国民をひと括りにして「善良な人たち」と呼んでいる。このように、語り手がジェーン対メアリーという対立図式を前面に打ち出さなかったことは、どのような効果を生み出しているのだろうか。以下では、この問題について考えてみよう。

まず、二分法という対立図式が用いられることを予想していた読者は意外に感じたであろう。というのも、作品全体に対してはプロテスタント対カトリックという図式が用いられているため、(c) の箇所でも、同様の二分法が用いられているだろうと多くの読者は予想していたに違いないからである。しかし、上の引用箇所では、「善良な人たち」である英国民は一体のものとして捉えられ、彼らの支持がジェーンからメアリーに揺れ動き、その結果、英国の宗教改革が大きく後退したという内容となっている。

サザランドが「(c) の箇所においてはアイロニーが明確であるとは言えない」（主張（３））と述べているのも、上の箇所で、語り手が二分法を前面に打ち出していないことが、一つの理由となっている。さらには、アイロニーを用いて批判を向けるべき対象は、本来ならカトリックのメアリー側となるはずが、(c) の箇所においては、ジェーン側にも批判が向けられており、この点もサザランドが明確なアイロニーを否定した、もう一つの理由と言えよう。もし、語り手がジェーン支持派を揶揄することなく、メアリー支持派だけをアイロニカルに批判していたならば、サザランドもリケッティも、(c) の箇所でアイロニーは明確になっていると主張したであろう。

VI

上述したように、デフォーは (c) の箇所では、プロテスタント対カトリック

クという2分法を導入していない。2分法を前面に打ち出さなかったのは、第IV節で述べたように、ジェーン・グレイの史実を、現在の王位継承の前例とすることは色々と差し障りがあるからだ。本節では、もしジェーン支持派とメアリー支持派という両派を峻別しつつ、アイロニーを用いてジェーン支持派を擁護すると、どのような結果が生じるのかという問題を具体的に考えてみよう。

まずアイロニーを用いて、表面的にはメアリー側を大仰に褒め称え、実質的にはメアリー側を批判するという展開に持っていくのはそれほど難しくない。しかしながら、アイロニーを用いて、表面的にはジェーン側を批判しながら、実質的にはジェーン側を擁護するという展開にもっていくのは中々難しい。というのも、第IV節で述べたように、ジェーン側は色々と問題を抱えているため、語り手がジェーン側をアイロニカルに批判しようとしても（たとえ語り手の批判が表面的なものに過ぎなくても）、読者はジェーン側への批判を文字通りに受け取ってしまう可能性が非常に高いからである。

ダドリーの策謀の悪辣さ、ヘンリー7世の曾孫という遠い血縁、対抗馬たるメアリーの人気など、ジェーン側が抱えるネガティブな要素は数多くあり、これらのうちのどれを取り上げても、「実はジェーン側への批判はアイロニーなのであり、実際にはジェーン側を批判をしてはいないのだ」ということを読者に示すことは困難なのである。そのため、レディー・ジェーン事件の内実を熟知しているデフォーは、(c)の箇所においては、2分法を用いて、ジェーン側を表面的に批判する（実際には賛同している）という展開に持ち込むことを断念したと考えられる。

また、デフォーはさらに踏み込んで、レディー・ジェーン事件における不都合な部分を巧みに隠し通すことで、デフォーが支持する、プロテスタント側にダメージを与えないように工夫していることが分かる。この問題については、原文を示すことになる第VIII節で再度扱うこととする。

VII

他の箇所のように二分法を用いることを止め、ジェーン支持からメアリー支持へと揺れ動いた英国民全体を批判の対象にしたからといって、それは直ちに、アイロニーが明確ではないという結論につながるとは限らない。以下では、サザランドの解釈とは異なり、(c)の箇所ですでにアイロニーが明確になっていることを明らかにしたい。この問題を詳しく分析するために、再度、同一箇所を引用する。

Another Reason may be taken from the Example of the good People in the Days of King *Edward VI.* They were very Good, Religious People, (that must be allow'd by all Sides.) and who had very great Zeal for the Protestant Religion and the Reformation, as it was then newly establish'd among them; and this Zeal of theirs appear'd plainly in a Degree we can scarce hope for among the Protestants of this Age, (*viz.*) in their Burning for it afterwards; yet such was their Zeal for the Hereditary Right of their Royal Family, that they chose to fall into the Hands of *Spanish* Tyranny, and of *Spanish* Popery, and let the Protestant Religion and the Hopes of its Establishment go to the D—l [=Devil], rather than not have the Right Line of their Princes kept up, and the Eldest Daughter of their late King *Henry* come to the Crown. (emphasis added, 171)

引用部分の1番目の文に対する分析は本節の最後に廻し、まずは2行目から始まる2番目の文に対する分析から始める。語り手は文の前半部で、彼らは、あらゆる側から支持を受けており、「極めて善良であるとともに、敬虔な人たちである」と大いに褒め称える（2行目から6行目）。そして、文の後半部では、彼らが自らの信仰に反してまで、王位継承者の血統を重視したために、カト

リックであるメアリーの即位を認めてしまい、その結果、英国内のプロテスタントへの弾圧を招くという大惨事を引き起こすことになったと語る（6行目から10行目）。

このように文の前半部では、語り手による英国国民への賛辞が途切れることなく続く。彼らは「極めて善良」であり、「敬虔」であり、「あらゆる側から支持」され、「プロテスタント信仰への熱意」が溢れんばかりなのである。しかしながら、語り手が彼らを褒め称えれば褒め称えるほど、このような褒め言葉は表面的なものに過ぎないのではないかという疑いが生じる。というのも、すぐ後で語り手は、彼らはメアリーを支持するという愚行に走ったのだと断罪しているからである。読者は2番目の文を読み進むにつれ、語り手が向けている皮肉な眼差しを感じざるを得ない。以上のような大仰な褒め言葉には、言語上のアイロニーが用いられていると言えるだろう。語り手が褒めれば褒めるほど、読者は、そのような褒め言葉が上辺だけの賛辞に過ぎず、実際には相手を貶めていることに気づくのである。

ジョン・バックは『文学用語と批評』の中で、言語上のアイロニーを次のように定義している。

Irony is a way of writing in which what is meant is contrary to what the words appear to say. Pope, for example, might praise someone extravagantly in his poetry, but the terms used can be so extravagant that they signal to the reader that the person referred to does not deserve such praise. (emphasis added)¹⁴⁾

言語上のアイロニーは「実際に伝えたい内容と表面的な意味とが正反対となるような表現の仕方」である。上の引用では、18世紀の詩人ポープが著した『愚物列伝』(*The Dunciad*)が具体例として挙げられている。作中でコリー・シバーを褒め称える言葉は、言語上のアイロニーなのであり、コリー・シバーへの余

りに大仰な賛辞は、実のところ彼への罵倒を意味していることに読者は気づくという仕掛けが施されているのである。

『愚物列伝』のケースと同じく、(c)の箇所では、語り手が語る「極めて善良」、「敬虔」、「あらゆる側から支持」、「プロテスタント信仰への熱意が溢れる」といった、大仰な褒め言葉の繰り返しは言語上のアイロニーに当たる。語り手が実際に言いたいことは全く逆であり、メアリーを支持した英国国民は、プロテスタント弾圧とスペイン流の教皇主義を英国に招き入れる原因をつくった、実に愚かな人たちなのだと言いたいのである。

語り手がアイロニーを用いていることは、プロテスタント殉教について触れている、6行目の箇所でも、より一層鮮明になっている。引用の4行目で、語り手は、善良な人たちが抱いた「熱意」(‘Zeal’)は、現在の王位継承問題において、選帝侯ジョージ支持派が抱く熱意と比べるならば、「比較にならないほどの高みに達していた」と述べている。そして彼らの熱意は、王位を勝ち取ったメアリー女王によって「後に、彼らが火炙りにされ殉教者となってしまう」ことすら意に介さないほど、熱烈で、明瞭なものだったと語り手は続けている。しかしながら、プロテスタント弾圧において、火刑に処せられたプロテスタント信者たちは、最初から火炙りになることを覚悟していたわけではない。にもかかわらず、語り手は、今の王位継承問題のプロテスタント支持派と比べるならば、ジェーン・グレイの史実におけるプロテスタント信者たちが抱いていた宗教心の篤さは比類なきものであり、自らが火炙りになっても屈しないほど、熱烈なものだったと語り、まるで彼らが火刑になることを予め覚悟していたかのように褒め称えている。このように、この箇所におけるアイロニーはより一層明瞭なものとなっており、読者はこの箇所に対しても、語り手が投げ掛けている皮肉なトーンを読み取ることになるだろう。

さらに、2番目の文の後半部においては、「善良な人たちが」自らの信仰に反してまで、王家の血統を重視したため、英国国民はメアリー女王によるプロテスタント弾圧を許し、「スペイン流の専制政治と教皇主義」に苦しむことになっ

たと語り手は述べる。このような英国国民の愚かな選択を語る際に、「正統なる血統」(the Right Line)という表現を用いている箇所にも、読者はアイロニーを読み取ることになるだろう。この言葉からも、英国国民は「正統なる血統」ではなく、英国にとってもっと重要なこと、つまり、議会政治と新教主義という国家の基本体制を守るべきだったのだという語り手の真意を、読者はアイロニーを通して読み取ることになるのである。

引用部分において、デフォーが‘Zeal’という語を巧みに用いていることについても触れておきたい。語り手は、引用の4行目と6行目に、同一語‘Zeal’を使っている。プロテスタントが抱く宗教心の篤さと、カトリックのメアリーを認めることに繋がる、王家の血統へのこだわりという、英国国民が抱え込んでいる、相矛盾する「熱意」を‘Zeal’という同一語で表現しているところにも、語り手のアイロニカルなトーンが浮き彫りになっている。2度用いられる‘Zeal’は意図的に使われているのであり、「熱心」(‘Zeal’)なプロテスタントである英国国民は、「正統なる血統」(アイロニーを込めている語)に「熱心」(‘Zeal’)な余り、カトリックの女王を容認するという愚行を犯すことになったのだとデフォーは言いたいのである。そして、アイロニーを用いているため、表面的には肯定的な意味をもつ‘Zeal’という褒め言葉を使っているものの、もしアイロニーを用いず、率直に語った場合には、語り手は‘Zeal’の代わりに、「狂信」というネガティブな意味をもつ‘Frenzy’という語を用いていた可能性がある。

最後に、本節の冒頭で触れた問いに戻ることにする。上述の引用の1行目から2行目で、語り手は「エドワード6世治下における善良な人たち」の振舞いという具体例が、選帝侯ジョージによる王位継承に反対する、もう一つの理由になると述べている。それでは、なぜ「善良な人たち」(英国国民のこと)の振舞いが、選帝侯ジョージの即位に反対する理由になるのであろうか。それは引用部分の直前のパラグラフで語り手が述べているように、英国国民が一致団結して選帝侯ジョージを支持しなければ、プロテスタントのジョージによる王位継

承が失敗に終わる可能性が非常に高くなるからである¹⁵⁾。次の王位は選帝侯ジョージが継ぐのが当然であると考えているデフォーから見ると、国民の支持が統一されているとは言い難い、英国の現状は極めて歯がゆいものであったろう。

そして、英国民の支持をまとめ上げ、選帝侯ジョージへの支持に一本化したというデフォーの目論見が、(c)の箇所においては2分法を用いなかった、もう一つの理由でもあった。ジェーン支持からメアリー支持へと揺れ動いた英国民をひと括りのものとして捉え、英国民の支持が揺れ動いたことを断罪することにより、デフォーは、英国民全体が一丸となれなかったことが前回の王位継承における最大の失敗だったという自らの主張を強調しようとしたのである。

VIII

上述の引用の、すぐ後に続く箇所においては、語り手の用いるアイロニーはより一層鮮明なものとなっている。

Upon this Principle they forsook their good Reforming King Edward's Scheme, Rejected the Protestant Succession, and they [forsook and rejected] themselves, Protestants, sincere Protestants, such as afterwards died at a Stake for their Religion, the Protestant Religion; yet they brought in the Pretender according to their Principles, and run the Risque [sic] of what could follow thereupon. Why should we think it strange, then, that Protestants now in this Age, and Church of England Protestants too, should be for a Popish Pretender? No doubt but they may be as good Protestants as the Suffolk Men in Queen Mary's Time were, and if they are brought to it, [they] will go as far, and die at a Stake for the Protestant Religion, and in doing this, no doubt but it is their real Prospect to die at a

Stake, or they would not do it to be sure. (emphasis added, 172)

まず、第Ⅵ節で簡単に触れた問いから始めたい。上述したように、デフォーはジェーン・グレイの史実に関する、不都合な部分を巧みに隠し通すことで、彼が支持するプロテスタント側にダメージを与えないように工夫している。英国史について或る程度詳しい読者は、ジェーン・グレイ事件の黒幕が初代ノーサンバランド公ジョン・ダドリーであり、彼の策謀のもと、ジェーンが王位に就いたことを理解している。しかし、デフォーは上の引用部分で、王位継承におけるダドリーの暗躍については一切触れていないのである。

引用の1行目にあるように、英国の宗教改革を押し進めるために、ジェーンを王位に就けようとしたのは、死期が近づいていた「エドワード6世の策」ということになっており、ダドリーへの言及は全くない。なお、現代の用法においては、‘scheme’は‘a clever, dishonest plan’というネガティブな意味も持つが、当時は‘plan’や‘project’というニュートラルな意味が主流であったことに留意する必要がある¹⁶⁾。

それでは冒頭部分に戻ろう。1行目の‘they’は直前の引用と同じく、「善良な人たち」(‘the good People’)のことであり、英国国民全体を指している。そして、‘this Principle’というのは、王位継承は血統の近さによって決するべきであるという原理原則のことである。彼らはこの原則に則り、エドワード6世の案(プロテスタントのジェーンによる王位継承のこと)を拒んだと、語り手は述べている。そして、このような英国国民の行動は、プロテスタントの王位継承を拒むことであり、後に火刑にかけられる我々英国国民を見捨て、さらには新教主義そのものを放擲することにつながったと語り手は続ける。

4行目の「僭主」(‘the Pretender’)とはメアリーのことを指しているのだが、語り手は意図的に「僭主」という語を用いている。語り手は、教皇主義とスペインの圧迫をもたらすことになったメアリーと、現在の王位継承問題における僭主ジェームズとを対比させ、彼を王位に就けることの危険性を読者に訴

えようとしている。善良さだけが取り柄である（皮肉に満ちている）、非常に愚かな英国国民は、誤った原理原則（王位継承における血統主義のこと）に則って、僭主メアリーを即位させ、英国に大いなる災厄を招いた。今回の王位継承においても、同様の危機が迫っていると語り手は言いたいのである。

そして、5行目で、語り手は「そういうわけなので、現在、プロテスタントが、カトリックの僭主を支持していることを、われわれは一体全体どうして奇妙に思うのだろうか」と皮肉たっぷりに述べており、この箇所においても、語り手が込めているアイロニーは非常に明確なものとなっている。語り手は、16世紀半ばに愚かな選択を行なった英国国民は、またもやカトリックの僭主ジェームズを王位に就けるといふ愚行を犯すのであろうと皮肉たっぷりに論評しているのである。

さらに詳しく説明すると、語り手はアイロニーを用いつつ、以下の内容を読者に伝えようとしている。ジェーン・グレイ事件では、英国国民はカトリック教を拒絶し、新教主義を英国に根付かせるべきであった。にもかかわらず、血統のみを重視し、メアリー女王という最悪の王を選んでしまった。その結果、プロテスタント国家であるにもかかわらず、カトリックの専制政治や忌まわしき教皇主義を英国に招き入れることになった。このように愚かな英国国民は、またもやカトリックの僭王ジェームズを、英国国王として性懲りもなく迎えることになるのだろう。それはもはや驚くべきこととはいえない。何ととっても、英国には16世紀における王位継承の大失敗という、愚か過ぎる前例があるのだから。このような英国国民を揶揄する口調から、語り手がこの箇所でアイロニーを用いていることに、読者は容易に気づくであろう。

英国法に則って肅々と王位継承を行なうならば、何ら問題は生じないはずであった。というのも、1701年の王位継承法によって、英国の王位はプロテスタントしか継ぐことが出来ないのであり、そもそも王位継承を巡って混乱が起きること自体が間違っているのである。にもかかわらず、1701年の王位継承法は蔑ろにされ、アン女王の跡はカトリックの僭王ジェームズが望ましいといっ

た、本来ならありえない主張がなされている。王位継承法に則り、肅然とハノーヴァー選帝侯ジョージが王位を継ぐべきであり、そうなるように英国民は一丸となって行動すべきだというのが、作者デフォーの考えなのである。彼の持論からすると、目下の情勢は嘆かわしいものでしかない。そして、政治的な著作においてアイロニーをしばしば用いてきたデフォーは、自らの持論を英国民に伝えるにあたって、率直な語り口を用いるのではなく、アイロニーを用いることを選んだのであった。

さらにアイロニーが顕著になるのは、イタリックで強調されている10行目である。「火刑で殉死することこそ、プロテスタントが真に期待していることに違いない。さもなければ、彼らは決して現在のような行動をとっていないだろうから」と語り手は皮肉たっぷりに語る（8行目の「サフォーク州の人々」(the *Suffolk Men*)とはジェーン・グレイ支持派のことであり、のちに王位に就いたメアリーにより火刑に処せられている)。しかしながら、英国のプロテスタントは、元々火炙りになることを想定しつつ、カトリックの僭主ジェームズを支持しているのだという主張は余りにも荒唐無稽であり、語り手がこの箇所ではアイロニーを用いていることに気づかない読者はいないであろう。以上のように、「(c)の箇所においてはアイロニーが明確であるとは言えない」という、サザランドの主張(3)に対しても賛同することは難しいと考えられる。

次稿では、本作品に対し、リケッティが展開した議論を再検討しながら、本作品への分析をさらに進めたい。

(次稿に続く)

注

- 1) Daniel Defoe, *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, ed. W. R. Owens and P. N. Furbank (Pickering & Chatto, 2000).
- 2) Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study*, 62.
- 3) *Ibid.*, 62.
- 4) *Ibid.*, 62.

ジャンルを超えた共通性（４）
—デフォー作品における政治・歴史・文学—（干井）

- 5) Ibid., 62.
- 6) Ibid., 62.
- 7) 'Lady Jane Grey' in *Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition*.
- 8) 'John Dudley' in *Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition*.
- 9) 'Mary I' in *Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition*.
- 10) 'John Dudley' in *Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition*.
- 11) Michel Shinagel, *Daniel Defoe and Middle-Class Gentility* (Harvard University Press, 1968), 17.
- 12) 原文引用は Daniel Defoe, *Constitutional Theory* に拠り、丸括弧内にページを記す。以下同様。
- 13) Ibid., 171.
- 14) John Peck, et al., *Literary Terms and Criticism* (Third edition; Palgrave, 2002), 147.
- 15) Daniel Defoe, *Constitutional Theory*, 171.
- 16) 現代の用法については *Longman Dictionary of Contemporary English* を、18世紀の用法についてはジョンソン博士の『英語辞典』（初版1755年）と *OED* を参照した。18世紀における 'scheme' の用法に関しては、『英語辞典』と *OED* はいずれも、「案・計画」（'plan'）の意味が主であり、「策略・陰謀」（'plot'）の意味は従であると説明している。より詳しく記すと『英語辞典』では定義1が前者の意味、定義2が後者の意味となり、また *OED* では定義5aが前者の意味、定義5bが後者の意味となっている。なお現代では2番目の意味が主流であることを *OED* は5bの定義で説明している。出典は以下の通り。*Longman Dictionary of Contemporary English* (Longman, 1978) 'scheme' の項；Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (Cambridge, 1996) CD-ROM 版 'scheme' の項；*Oxford English Dictionary* (Second Edition; Oxford University Press, 1992) CD-ROM 版 'scheme' の項。